07年サバ類１

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 漁獲	産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	在庫	加工品 缶	加工品 干	加工品 蔵	加工品 節	消費支出 生(グラム)
18	652	536.2	48.4	179.9	1.2	11.9	4.2	3.0	0.4	102.5		17.4	26.4	12.1	1,557
19	460	403.5	45.8	156.3	2.5	12.1	3.9	3.3	0.6	100.8					1,610
%	71	75	95	87	215	102	94	111	144	98		0	0	0	103

年	価格 産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	消費支出 生(円)
18	62	278	70	289	381	506	498	540	1,374
19	82	266	90	291	369	453	460	426	1,360
%	132	96	129	101	97	90	92	79	99

漁獲と資源

19年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、46.0万トンで前年(65.2万トン)をかなり下回り、近年の平均(50万トン)を下回る水準であった。

これは、特に北部太平洋海域での漁を反映したものである。

マサバ太平洋系群の資源量は1970年代には400万トン、1980年代前半は150万トン程度で推移したが、1980年代末に加入量の減少と強い漁獲圧により減少し近年では低水準にある。親魚量は1980年代中期の50万～60万トンから1990年代には5万～12万トンへと低下した。再生産関係（＝加入尾数／親魚量）は自然の要因により、また年代により変化するが、親魚量が45万トン以下になった1986年以降は加入量が減少すると同時に変動幅が大きく不安定になった。1992年、1996年、2004年に少ない親魚量から卓越年級群が発生している。近年は2004年級群に支えられて資源量・親魚量ともに増加している。現在卓越年級群を保護して資源回復を図るために資源回復計画が実行され、未成魚の獲り控えの努力が行われている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1973～1989年には100万～130万トンで比較的安定していた。1987～1990年にかけて減少した後、増加傾向を示し、1994～1996年には140万トンを超える高い水準に達した。1997年以降、資源は急減し、2005年は61万トン、2006年は54万トンと低い水準に留まっている。加入量は1997年以降低い値で推移していて、2003、2004年にはやや増加したものの、現在は依然として低い水準にある。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2004年以降はやや増加した。再生産成功率は1999年以降、高い値を示しているが、2005、2006年はやや低い値となった。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1996、1999、2002および2004年級群の加入量が多かったため、1996年および1999年以降300千トン以上の高い水準にあり、2004年に650千トンまで増加した。その後2005、2006年級群の加入量が少なかったために減少傾向にあり、2006年は459千トンであった。2004年級群は、1996年級群を上回る卓越年級群であり、現在の高い親魚量の主体となっている。2007年の資源量は、加入量を過去の中央値と仮定して2006年の値から前進法で推定すると302千トンである。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量、親魚量は1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005年以降は増加傾向を示している。加入量は1992年以降、多少は変動するものの、おおむね同程度の水準を保っていたが、2004～2006年はやや高い値で推移し

た。発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる再生産成功率は、2004年に高い値を示した他は比較的安定している。

産地水揚量と価格(継続漁港)

19年の産地水揚量は、40.4万トンで九州地区で好調だった他は水揚げが減少したため前年（53.6万トン）をかなり下回った。

価格は、水揚減少と、北部太平洋海域でのサイズも前年より大きかったことを反映し82円で前年（62円）をかなり下回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、三陸、常磐、東海でやや低調になったことで、東シナ海での増加をカバーしきれなかった。昨年久しぶりにまとまった道東海域では、低調な漁獲に終わった。

海域別漁獲量

海　域	18年	19年	対比(%)
道　東	12.7	0.8	6
三　陸	124.3	97.5	78
常　磐	181.2	84.8	47
東　海	79.0	67.7	86
薩　南	28.2	31.5	112
東ｼﾅ海	101.1	148.4	147
山　陰	22.6	34.7	153
その他	0.8	5.0	596
合　計	549.8	470.4	86

三陸（単位:1000トン）

月	18年	19年
1	3.2	0.7
2	0.3	0.5
3	0.1	0.5
4	0.0	0.0
5	0.1	0.0
6	2.6	1.5
7	6.6	19.5
8	16.0	28.1
9	38.2	21.7
10	38.1	16.1
11	12.6	6.4
12	6.3	2.4
計	124.3	97.5

MAX　H53　69万トン

常磐（単位:1000トン）

月	18年	19年
1	28.2	21.2
2	9.2	8.0
3	3.1	1.0
4	8.0	0.2
5	16.7	0.4
6	15.9	0.1
7	8.5	5.2
8	2.0	4.5
9	17.8	4.2
10	12.0	8.9
11	31.2	9.9
12	28.7	21.2
計	181.2	84.8

MAX　H6　14.1万トン

三　陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年をやや上回り比較的好調であったが、南下期には漁獲が急激に少なくなり、来期に不安を残した。

本年は昨年並みに７月下旬に入ってすぐ三陸北部でスルメイカとの混獲でまき網によるマ

サバの初漁があり１０月までまとまった漁獲であったが２歳魚以下の魚が少なく昨年を下回った。また本年も７月下旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、昨年（約３０００トン）を上回る漁獲で９０００トン超であった。

魚体は、当初から３歳魚(2004年級群)主体であり、前年以上に型が大きいマサバの漁獲も目立った。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、１０月主体に昨年の倍に達したが、一昨年には達しなかった。

常　磐

本年の越冬サバ漁は一転低調に推移し、結局越冬寒サバは30.4千トンの漁獲で前年(48.5千トン)をかなり下回った。

また、春（５～７月期）の北上期の漁獲も極めて低調で5.7千トン程度で前年(41.1千トン)をおおはばに下回った、南下群の漁獲も資源回復計画に基づく休漁等もあり40千トンに終わり前年（71.9千トン）をかなり下回った。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は上期に好調で、下期の低調さをカバーした格好となり、結果的に昨年を若干下回った。

魚体は、周年を通じてほぼ3歳魚（2004級群）であったが、漁期後半には、０，１歳魚が獲れだした。

東　海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、54年の17.7万トンをピークに減少しており、近年においても1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。しかし、低調な中ではあったが、本年は459隻（前年238隻）の出漁でマサバの来遊も多かったことで延べ出漁隻数も増加し,漁獲も4,001トン（前年2,630トン）で昨年をかなり上回る漁獲となった。

19年の漁獲量は、マサバが2,673トンで前年（421トン）を大幅に上回った。ゴマサバは1,328トン（前年2,209トン）でマサバが６倍、ゴマサバはかなり減少した。

東シナ海(単位:1000トン)

月	18年	19年
1	12.1	32.0
2	7.1	15.4
3	5.8	13.2
4	2.0	5.6
5	1.5	3.4
6	1.6	2.1
7	2.8	5.6
8	6.6	4.6
9	6.7	7.9
10	20.9	14.7
11	13.9	24.9
12	20.2	19.2
計	101.2	148.4

ＭＡＸ　Ｈ８　22.2万トン

山　陰(単位:1000トン

月	18年	19年
1	3.6	16.6
2	0.7	4.4
3	0.2	2.3
4	0.2	2.1
5	0.1	0.0
6	0.0	0.6
7	0.1	0.1
8	0.7	0.3
9	0.4	0.4
10	6.3	1.1
11	5.0	2.2
12	5.5	4.4
計	22.6	34.7

ＭＡＸ　Ｈ６　14.

東　シ　ナ　海

19年の年明け後の冬漁は前年来の漁を反映し好漁を維持し水揚げもかなり多かった。また夏場の閑漁期の漁も前年をやや上回り、9月以降の秋漁も比較的好漁のうちに終わり、結果的には昨年をかなり上回る水揚げとなった。

魚体は、本年も概ね300g以下のギリ、ローソクサバ（1歳魚）が漁獲の主体ではあったが、その割合は約50％で近年ではかなり少なく、前年（72％）を大きく下回った。したがって、本年は鮮魚向けを始め、加工向けにも多く利用されたのが特徴。

山　陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が、九州西部同様好調に推移し、また閑漁期の夏場の漁も昨年をやや上回った。秋漁は前年をやや下回ったものの、全体的には前年をかなり上回った。

魚体は、2005、2006年級群が主体であった。

輸　　入

本年の輸入量は、4.6万トンで、前年（4.8万トン）を引続きやや下回った。これは主にノルウェーからの搬入減少を反映したものである。本年の搬入ピークは12月集中型になったが、国内特に三陸や九州での好漁とサイズ組成の良さ、価格の安さの点で国産シフトが顕著になったことが反映したものである。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーが90%とシェアが更に高くなっている。また、それ以外の国でも数量は落としておりカナダ、イギリスが、それぞれ2,118トン（前年3,204トン）、76トン(前年1,325トン)、アイルランドが680トン(前年682トン）、中国が547トン(前年1,026トン)であった。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が88%（前年:80%）主体に600ＵＰが12%（前年:20%）で、シェアでは600UPが減少し、4-6サイズが増加している。また最近では600ｇUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との買値の競合関係が顕著になっている他、本年は、ノルウェーサバを巡っては特に600UPサイズでは、ロシアに買い負けしている。

価格は、266円でほぼ前年(278円)をやや下回ったが、依然海外の高値オファーでの買いが少なくなったことを反映したものである。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は9,721トンで前年(10,511トン)をやや下回っており、伸びが止まった。

輸　出

本年の輸出量は、15.6万トンで極端に多かった前年(18万トン)を下回ったが、依然水準としては高い。これは北部太平洋、九州、山陰地区等のサバが中国、韓国を始め、エジプト、フィリピン、タイ、ナイジェリア、パプアニューギニア等、アジア・アフリカ・中近東諸国に向けて数量を伸ばしたことによるものである。また、缶詰輸出も2.5千トンと史上最低の水準であった前年(1.2千トン)を上回った。

在　庫　量

在庫量は、10万トンと前年(10.2万トン)をやや下回った。

これは、輸出の減少もあったが、国内生産量、輸入の減少がみられた結果である。

消費地入荷量と価格

19年の東京消費地入荷量は、国内生産が減少したものの、サイズも大きく生鮮が1.2万トンと前年（1.2万トン）並みであった。

また、冷凍は3.9千トン（前年4.2千トン）、塩干3.3千トン（前年3千トン）、塩蔵0.6千トン（前年0.4千トン）と原料は減少したが、製品は何れも増加した。

価格は、生鮮369円（前年381円）、冷凍453円（前年504円）、塩干460円（前年498円）、塩蔵426円（前年540円）であった。

価格は、生鮮、冷凍、製品とも国内原料（国産に切り替えた加工メーカーも多かった）が安かったことを受けて何れも下落した。

また、消費地市場、末端のスーパー・量販店では、今年は三陸でもゴマサバが目立つようになり、鮮魚販売や、加工品にもかなり利用された。なお消費支出をみると数量は増加したが、単価が安く金額は若干減少した。